

# 日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol. 7 2012年4月1日

## 目次

巻頭語 .....	藤 能成
会長就任のご挨拶 .....	ケネス 田中

### 第3回学術大会より

1. 第3回仏教心理学会を振り返って ..... 大会長 三友 健容
2. 第3回学術大会アンケートを実施して..... 実行委員 鮫島 有理
3. 基調講演から  
「慈悲の怒り」を支える、宗教者ならではのネットワーク..... 葛西 賢太
4. ワークショップから  
ワークショップに参加して ..... 井上 ウィマラ
5. 参加者感想  
仏教心理学会に期待すること ..... 土江 正司  
第3回学術大会に参加して ..... 岡野 さつき

### 追悼

1. 大須賀 発蔵 先生を偲んで ..... 白岩 紘子
2. 故 牛田博子さんへの追悼に寄せて ..... 安部 磁子

### 自著紹介

1. 羽矢辰夫著 『ゴータマ・ブッダのメッセージ：「スッタニパータ」私抄一』
2. 岡野守也著 『コスモロジーの心理学：コスモス・セラピーの思想と実践』
3. 大下大圓・千石真理他共著  
『対話・コミュニケーションから学ぶスピリチュアルケア：ことばと物語からの実践』

編集後記 .....	千石 真理
------------	-------

## 巻頭語

### 言葉と現実を繋ぐ

藤 能成（龍谷大学文学部教授）

2011年3月に起こった東日本大震災、福島第一原子力発電所による放射能汚染という未曾有の困難に見舞われる前から、日本の人々は多くの精神的苦悩を抱えてきた。孤独・孤立・不安・不信・不自由さ、虚無感・死への恐怖等である。これらの苦悩の基盤には、私たちが身に付けてきた認識方法自体が抱える問題があるように思う。

日本は、世界でももともと世俗化された非宗教的な社会だと言われ、宗教の社会的地位が低く人々の宗教への関心も薄い。このような状況が生まれた背景には、明治以降の積極的な西欧化の推進にともなう科学絶対主義の定着、そして戦後の「科学の知」に基づく教育があろう。デカルト、ニュートンに代表される近代西欧の科学思想は、唯物主義、要素還元主義、機械論的自然観に立ち、自然を人間から切り離し、抽象化・概念化・数量化・客観化してきた。抽象化・概念化の故に個々の事象には目が向きにくく、観念化しやすい。

日本における宗教・思想に関する諸研究が現実との繋がりを失い観念化しているのは、科学的思考・認識方法の故であろう。この点は仏教学も例外ではない。人々は、抽象化された記号としての言葉が、実態・実体を表すものと錯覚しているのである。もともと宗教や思想は、人が現実を生きる実感や体験を基盤として構築されたものであり、その多くは「より良く生き、幸福な社会を実現すること」を願いとしている。しかし研究方法自体が現実から遊離したために、現実に対応する力を失ってしまった。

現代人が抱える精神的苦悩は、自らの体験や現実と結びつかない言葉によって思考・認識することにその原因があるのではないか。それによって人々は観念の世界・仮想世界に閉じ込められ、ありのままの現実に触れられなくなるからである。現実と繋がりを持たない言葉による思考・認識は、現実の問題に対応する力を持たないので、頭の中で堂々巡りを繰り返すことになる。

これは仏教の立場から見ると無明（智慧がない状態）に他ならない。智慧とは「ものごとを

りのままに知り見る力（如実知見）」であり、「智慧を得ることによって苦悩が解決される」とするのが、仏教の根本教説である。現代人が抱える精神的苦悩の原因は、無明なる思考・認識方法にある。苦悩の解決のために、まず私たちは、自身が使用する言葉を自らの体験や現実と結びつけなければならない。そこに仏教が果たし得る役割がある。

今こそ仏教と心理学が互いに協力し合い、人々を観念の世界から解放し、智慧の生き方へと導いていかなければならない。そのためには、抽象化・概念化された言葉によりものごとを捉える「知性を基盤とする認識の仕方」から、個々の現実に向き合い、直接触れ、ありのままを捉える「感性を基盤とする認識の仕方」への転換が必要である。釈尊における瞑想、そして仏教各宗派が伝えてきた念仏、坐禅、唱題目、真言、歩き遍路等の行は、その転換のための方法であり、その本質は「意識の集中」にある。

今年 12 月、本学会第四回学術大会を龍谷大学において開催するにあたり、観念を脱して現実に根差し、苦悩する一人ひとりを幸せへと導くことのできる「仏教心理学」が歩み出し、仏教復興・日本復興に向けた具体的な可能性が示されることを願ってやまない。

### 学会長就任のご挨拶

ケネス田中 （武蔵野大学）

春分の候、皆様には益々ご発展のこととお喜び申し上げます。

初代会長恩田彰先生の後を受け、今年度4月より第2代会長に就任いたしましたケネス田中でございます。

本学会は、会員数も発足から3年半余りで現在150名を超え、目をみはるような発展を遂げております。これもひとえに、学会員の皆様のご協力を始め、運営委員会会員のご尽力によるものご心より御礼を申し上げます。

中でも、初代会長恩田彰先生には、とりわけ深い感謝の意を表させていただきたく存じます。学会設立以来、先生の大局を見据えたご判断と高邁なお人柄のおかげで、誕生間もない新しい学

会は大きな励みと自信を得させていただきました。また、副会長として岡野守也先生には、学会の「真髓」でもある学会誌の編集長として優れた研究誌を発行していただき、学会として力強い歩みを始めることができました。両先生には、今後ともご助言・ご指導を仰がせていただきたく、心からお願い申し上げます。

なお、学術大会開催に際して、初年度は武蔵野大学、昨年度は立正大学、本年度は龍谷大学にご協力をいただけますことはまことにありがたいことで、ここに改めて感謝申し上げます。

今年度からは、新設の評議委員会の活動が大いに期待されます。約30名の評議委員の先生方には、運営委員会を支援していただき、学会の活性化に大きく貢献していただけるものと期待しております。また、運営委員会には、井上ウィマラ先生（副会長・学会研究誌編集長）、三友健容先生（会計）、千石真理先生（ニュースレター編集者）、岡野守也先生、および葛西賢太先生が選任されており、私も含め、共に今後3年間、学会のために尽力する覚悟でおります。

さて、私はこの3年の任期中に、1)行動性、2)国際性、3)伝達性の3点について、その充実を目指したいと思っています。これらは、既に本学会の設立趣意書や学会主催のシンポジウム等で掲げてきたものであり、また、2010年学術大会基調講演で安藤治先生も力説されたところでもあります。私も、これらを更に強い信念をもって実現しようと心に期しております。

行動性とは、日本を取り巻く現代の社会的な問題に、より積極的に関わっていくことです。もちろん、学会の基本は研究にあります。例えば、シニアセンターや老人ホームでの傾聴活動など、学会員有志による行動的な活動を学会が奨励することは大いに可能であり、真剣に検討したいと思っています。

国際性とは、近年、仏教と心理学の研究が活発に行われている英語圏の研究成果に目を向け、その成果を我々の研究にも活かしていくことです。これは、安藤先生が基調講演で強調された「世界性」の重要性と一致することでもあります。その一つとして、海外の研究者と交流を促進し、可能であれば近い将来、仏教心理で世界的に著名な方を我々の学術大会に招待できたらとも考えております。

伝達性とは、学会員一人ひとりが積極的に、日本仏教心理学会の趣旨や活動について、あまね

く社会（知人・メディア・関係各所等）に知らせることです。要は、宣伝することです！本学会は、設立されて3年余りということもあり、認知度がまだ比較的に低いので、あらゆる機会を捉えて積極的に本学会の存在を社会に訴えていく必要があります。会員数も更に増やしていくことで、学会の経済的基盤を固め、本部の事務体制も充実することができます。

私は、現代日本社会において「仏教と心理学」という分野への興味・関心は今後ますます高まり、私たちの学会が重要な役目を果たすことができると確信しています。私は上述した3項目を達成するために、新会長として精一杯努力をする所存ではありますが、全ての学会会員の皆様のご支援なしではその達成は困難であります。どうぞ皆様のお力をお借しください。皆で一丸となって頑張っていけたらと切望しております。

終わりに、学会会員の皆様のますますのご支援とご活躍をお願い申し上げ、これを持ちまして就任のご挨拶にかえさせていただきます。

### 第3回学術大会大会長より

第3回仏教心理学会を振り返って

三友 健容（立正大学）

昨年3月11日に東日本を襲った大地震は、地殻変動の連鎖反応を引き起こしており、中東に端を発し、野火のようにつぎつぎと広がっていく民主化運動（アラブの春）とイスラム教化の動きも不気味な気配を見せている。独裁政権の呪縛から解放され、民主化をもとめた運動は極端なイスラム教へと回帰しつつある。それを一番恐れているのは、ちからによって侵略し領土を確保したイスラエルであろう。次第に高まる反米感情とイスラム化は、まもなくイスラエルの存亡にも大きな影を落とすに違いない。さらに悪いことに、ユーロ圏の財政破綻はイスラム系移民たちへの反発をうながしている。

また、中国や北朝鮮などの人権や国際法無視は、アジアでもおおきな火種となりつつある。一部の利益や国家の利益のみを優先した結果、一つのバランスが崩れれば、世界は大恐慌どころか、

世界戦争へと突き進むことになってしまう。

このような不安定なときこそ、傷つけ合うことなく、みんなが仲良く助け合える大らかな考え方が必要となる。善悪の対立も超え、人間だけではなく生きとし生けるものの救いや自然との調和を説く仏教の融和の精神と、弱肉強食を否定する不殺生の教えとが必要となる。

立正大学でおこなわれた仏教心理学会における上田紀行先生の「慈悲の怒り」、篠原鋭一先生の「災害支援活動」、井上ウィマラ先生の「災害支援活動から学んだこと」をはじめとする基調講演と発表は、アンケートに現れているように、多大な感銘を与え、参加者がそれぞれの立場で深く考えさせられたにちがいない。

大震災という大災害は、われわれ仏教心理学会でも何ができるかという意識を共有させた。しかしよく考えてみると、阪神大震災なども含めて今回の大震災は地殻変動など種々の要因があるだろうが、大地が荒れ狂ったのではない。ひとびとの心が荒れ狂いだしたからでもある。いやむしろ、己れの心が荒れ狂っていた結果ではないかと深く反省している。

仏教の原点は「心外無法」（こころを離れて森羅万象があるのではない）であり、己れの心の投影である。悲惨さは大震災だけの問題ではない。現代社会の軋轢のなかで、みんながストレスを抱え苦しんでいる。

八世間法というのがある。儲けたいがどうしたらよいか（利得）・大損をしてしまそうだがどうしたらよいか（不利得）・ひとを蹴落としてでも地位・名声を得たいがどうしたらよいか（名声）・得た地位を失いそうだがどうしたらよいか（非名声）・多くの称賛を得たいがどうしたらよいか（称賛）・非難されそうだがどうしたらよいか（非難）・幸せになりたいがどうしたらよいか（幸福）・苦しみから逃れたいがどうしたらよいか（不幸）と、いつも恐れ悩んでいる。大統領であろうが、首相であろうが、どのようなお金持ちであろうとなかろうと、地位に就く前と後では顔付きが違ってしまうほどに悩み苦しんでいる。ひとびとの苦悩は、昔も今も根源的に変わってはいない。仏の教えは、これら世間の苦しみに対する答えを用意してきた。宗派の教義や教学に縛られることなく、とらわれることもなく、この智慧の宝庫をさまざまな角度から討議し研究し、現代に活かすような、おおらかな学会へとさらに進展していくことを期待している。

### 第3回学術大会実行委員より

第3回学術大会アンケートを実施して

鮫島 有理 （臨床心理士・静学園短期大学非常講師）

12月10日（土）立正大学に於いて日本仏教心理学会の第3回学術大会が行われ、今大会では第1回、第2回大会にはしていなかった「大会アンケート」を実施させていただいた。選択項目だけでなく、自由記述もお願いすることで、記入される方々に労を執らせることになったが、31人の方から貴重なご意見を伺うことができた。紙面を借りて、貴重なご意見をくださった方々にお礼申し上げたい。集計していて感じたことは、みなさん熱心に回答してくださり、記入されたみなさんの真摯なお気持ちが伝わってくるようであった。

アンケートに回答してくださった方々は、年齢層では30代以下の方が20%と少なく、40代以降の方が多かった。また、男女比も7対3で男性が多く、職業（複数回答）も、大学教員、研究職、学生が半数を占めた。既に学会に入会されている方が8割であったが、未入会の方も積極的にご意見を寄せてくださった。大会への登録も事前に登録された方が8割強で、参加登録費は、妥当が半分以上、安いと感じていらっしゃる方も半数近くおり、高いと感じていらっしゃる方は一人もいなかった。プログラムについての自由記述では、忌憚のないさまざまなご意見が記入されていた。基調講演では、否定的なご意見も見られたが、おおむね興味深かったというご意見が多かった。皆さんの心に一石を投じることになった講演であったようである。ワークショップでは、篠原、井上両先生の実体験に基づくお話に感銘をうけた方が多く、各種発表では、指定討論者を決めてはどうか、といった具体的な提案も多くみられた。なお詳しい集計内容は、当会HPに掲載されているので参照されたい。

大会アンケートの集計について概観したが、ここからは日本仏教心理学会への期待をこめて書かせていただきたい。

ワークショップでも話し合われた東日本大震災であるが、震災後、私は東京都からの緊急派遣スクールカウンセラーとして、いわき市、相馬地区、会津の学校に行かせていただいた。同僚を

早く帰宅させたがために津波で喪った先生や、「人を助けることはいいことだ」との信条を日々伝えていた先生のクラスだけ生徒が 4 人亡くなった話など、通り一辺の傾聴などでは到底対応できるものではなかった。また、個人的には女川、石巻にも訪れたが、人々が日々生活を営んでいた場所が根こそぎ無くなり、人けのなくなった土地を見て、自然の猛威を感じるとともに無力感を覚えた。このように言語に絶する災害ではあったが、この震災により、誰しものがいつか迎える「死」とは何かを考え、なんのために生まれてきたのかを問い、仏教を学びたいという人たちも今後増えていくのではないだろうか。

一方、仏教心理学とはかけ離れた分野ではあるが、震災以降、地震や津波だけを研究するのではなく、歴史資料等にかかれていたことから多くのことを学ぼうという学際的な機運が高まってきた。地震考古学の分野は 80 年代からあったようだが、地震跡の調査や歴史資料の記述を照らし合わせることによって、地震の予測を行い、将来の予知に活かすという試みがなされているようである。このように仏教心理学のみならず、これまではあまり注目されていなかった分野において学際的な研究が今後より一層脚光を浴びることになるのではないだろうか。地震学と考古学を並行して研究することで、災害を最小限に食い止め、ひいてはそれらの研究が人命を救うように、当学会においても仏教学と心理学を研究し、各人がそれぞれに模索することで、個々に研究しただけでは到達しえない境地に達することができるかと信じている。また、それらが実現することで、人々を利することができるであろう。日本仏教心理学会の益々の発展を願う次第である。

### 第3回学術大会基調講演から

「慈悲の怒り」を支える、宗教者ならではのネットワーク

葛西 賢太（宗教情センター）

上田紀行氏の講演は、仏教界に関わる人々に、さまざまな「当事者」に寄り添って生きることを求める、盛りだくさんで熱のこもったものであった。講演そのものは別途掲載されるであろうし、上田氏のメッセージはわかりやすく噛み砕かれていて、それを解説する必要はない。そのた

め、以下では上田氏に触発されて私のコメントを二点のみ述べる。

日本国内の全コンビニ数の二倍の数、仏教寺院があることをあげ、それら寺院がさまざまな悩みを持つ人々に寄り添うことの大切さを、いくつか事例を挙げて説かれた。私は同様の指摘とそれに対する構想を、曹洞宗の宇野全智氏からうかがったことがある。

宇野氏はその構想を「かかりつけ寺院」と呼び、自殺を念慮する人々や、その家族、同僚、友人が相談をする際に、専門家につなぐ窓口の一つとして寺院を機能させられないか、と構想する。これは理念のみではなく、彼は自らが修行をされた山口県の寺院において、ある種の「駆け込み寺」的な短期的機能と、長期的な関わりを重ねていく「物理的/社会的/宗教的な場」としての機能を活用している。病名をあげるに至らない「不定愁訴」のようなものであっても相談でき、そこから危険な兆候を感じ取りつつ早めの手当を行い、適宜専門家の手にもつなぐ、そうした結節点として、寺院が役立ちうることを示唆している\*。

上田氏の講演を聴きながら、宇野氏の実践が浮かんだ。宇野氏は本願寺の取り組みから示唆を受けたと語っており、このような自覚にたっている僧侶は少なくないのだが、それが今ひとつ知られていない。ただ、これを、僧侶やその家族が単独で負おうとするなら、彼らをつぶしてしまいかねないことも、心に置くべきだ。物心両面でサポートするための、人をつなぐスキル（とても重要）、教義や教団運営方針の上での支持（これもとても重要）、物理的にサポートする仲間たちの存在（もちろん重要）であろう。熱意ある僧侶が、屋根に上がったらはしごをはずされて追い込まれる、というようなことがないようにしなければならない。また、このような活動を知り、サポートする、宗門外の人々の存在の大切さも忘れてはならない。上田氏の著書の読者たちが、仏教界に投げかけるとともに、ぜひ手をつないでいただければ素晴らしいことである。

私は、宗教者がケアを実践する場合に、それをサポートするために何が必要かを、宗教の社会貢献のあり方を研究する仲間\*\*とともに考えてきたのだが、しばしば宗教者に対する強い倫理的要請の一方で、物心両面からのサポートが十分行われているのか、心配になっている。善意を持続可能にするしくみが必要なのだ。また、ケアの実践は狭義の布教活動からは切り離されるべきであるとしても、実践者の支援に宗教的資源を適切に投入する方策を考えられるべきだと思って

いる。たとえば、ターミナル・ケアの当事者のための瞑想だけでなく、支援ボランティアのために瞑想が持つ意義を、真摯に考えられるべきである\*\*\*。

仏教が持っている思想的資源を、思想としてしまい込んでしまうのではなく、実践に用いる責任があると上田氏は説く。その観点から、講演の中では、有名なキサゴータミと芥子の実のエピソードを、「無常」の思想を、思想として「無情」に伝えるだけでなく、無名の人々によるケアのものがたり——とり乱していた彼女の話の聞き、自分の話も語り、悲しみや苦しみを交感し合う中で、縁起や無常におのずと気づかされる——そして、キサゴータミは鬼子母神となる——として説いて見せたことは、当事者に寄り添うことを重んじる上田流の説法的一端を見た思いであった。この話は、井上ウィマラ氏に教示を受けたということであったが、上田氏が語るとまた別の味わいがある。

当事者によりそうという理念を、じつに具体的に、そして熱く説いてくれた上田氏に感謝したい。

\* 宇野全智「寺院を中心とした新しいサンガ形成の可能性から VII」『教化研修』53、2009年。

\*\* 宗教の社会貢献研究会 (<http://shukyo-shakaikoken.seesaa.net/>)。また、現在、宗教的なケアが持つ現代社会にとっての意味を考察する編著書『橋を架け絆を生むケア』を準備中。

\*\*\* 葛西賢太「瞑想が閉じる世界、瞑想が開く世界」『宗教と現代がわかる本 2011』平凡社。

### 第3回学術大会ワークショップから

ワークショップに参加して

井上 ウィマラ (高野山大学文学部准教授)

東日本大震災の原発事故を招いた戦後日本の問題を中心に「慈悲の怒り」という逆説的な視点から仏教への熱い思いを語られた上田先生のお話、自死の問題に取り組みながら被災地での支援活動においても強靱な人間力で被災者の心を支えてこられた篠原住職のお話、二人の大変に熱意のこもったお話の後で、私はレスポンドしてマイクを握りながら、どのようにしてお二人の熱

い話を仏教心理学という新しい分野における取り組みにつなげていったらよいのか、戸惑いを抱えながらお話をさせていただきました。

冒頭に私の心に浮かんだのは、上田先生の「深い絆を結ぶときには、お互いに傷つけあうことを避けることはできない」というお話と、篠原住職が被災者の若者から「あんたらに、俺たちの気持ちはわからないだろう」と言われた時、「君たちこそが希望なのだよ」と応えたというお話でした。

さまざまな臨床現場で実感することは、本当の意味で親密になるためには、お互いの本当の気持ちに向かい合うことを避けることはできないということです。その時に専門職として乗り越えなければならない試練は、クライアントからの攻撃などの転移に対して、逆転移に巻き込まれてしまうことなく、クライアントをより深く理解するための情報源として逆転移を自覚的にリサイクルしながら、どのようにして治療的な関係を維持してゆくかということではないかと思います。

ワークショップが終わって、お二人と会食していたとき、篠原住職からこんなお話を伺いました。お寺にアルジャジーラの記者が泊まりこんで取材活動をしていたときのこと、その記者は「こんなに豊かで平和な日本の国で、なぜこんなにも多くの人々が自殺するのか。きっと、日本には人々の命を吸い込んでしまうブラック・ホールがあるに違いない。私たちは、そのブラック・ホールが何であるのかを突き止めたいと思ってきたのです」と語ったのだそうです。

私は、レスポネントとしての講演の中で、子育て(チャイルド・ケア)、看取り(ターミナル・ケア)そして喪の仕事(グリーフ・ワークあるいはグリーフ・ケア)に共通する3要素として、ボウルビィを引用しながら親密性、継続性、互惠性の大切さについてお話をしました。親密であるということは、好きな気持ちだけではなく、怒りや憎しみの気持ちも含めて、時に喧嘩することはあっても仲直りできるから大丈夫だという自信や信頼感を必要とします。泣き顔が笑顔に変わるまで人間関係を維持してゆく体験の中で、地獄も天国も人生の一部なのだという自我の統合性が育ちます。そのためには、自他のどちらかだけが幸せになるのではなく、双方が共に喜びと幸福感に満たされる必要があるということです。

ボウルビィの愛着理論が教えてくれることは、人生の最初期にそうした諸体験を通して得られた基盤は、その後の人生全体におけるワーキングモデルとなるということです。「その人の性格構

造がどのように形成されたかということは、離別や喪失などの危機的状況におけるその人の反応パターンを規定する最も大きな条件である」という言葉は、とても味わい深いものです。

クラインは、離乳に象徴される人生最初期の喪失体験がその後のうつ状態において繰り返されるパターンを形成するという、「抑うつ態勢」という概念を提唱しました。ウィニコットは、その際に母親(あるいはその代わりとなる養育者)が果たす発達促進的な環境の役割を考慮して「思いやりの起源」という見方をしています。子どもの攻撃性に対して、養育者がそれを受けとめて世話を継続するという形で許しが得られたとき、「大切なものを壊してしまったのではないか」という子どもの原初的不安(罪悪感)が思いやりに生まれ変わるとする考察です。

産業革命によって女性や子どもが労働力として借り出され、核家族化が進み、地縁や血縁で結ばれた地域社会に根ざした家族のつながりが薄れてきました。そうした人間関係の変化が人間関係の基盤形成に与えた影響を、バリントは「基底欠損」と呼びました。それに加えて昨今の情報革命は、携帯電話やインターネットの発達によって、その人が目の前にいても(便利な機械でどこか別なところに心を向けてしまっているために)その人はそこにいないような状況が数多く展開するようになってきています。

こうした要因が、人の命を吸い込んでしまうブラック・ホールを作り出す条件のひとつになっていることは間違いないと思います。そしてその上に、上田先生が話してくださった、戦後の日本がたどってきた道の中ですら残してきた問題が加わります。私は自分なりの視点から、そのことを「悲しむ力と育む力」という視点で捉えています。戦争で失ったものを悲しむことを避けてきたことによって、人を育む力をも失ってしまったのではないかと思うのです。

ブッダはスッタニパータの「矢の教え」で、煩惱の矢が刺さったまま嘆き悲しむと、その人は自らを害してしまし得ることがないと教えています。単に、「嘆き悲しむな」と教えているのではないと思われます。現代の悲嘆研究の視点から読み直すと、悲嘆の中に刺さった貪瞋痴という煩惱の矢を抜き取って、自らを害することなく、自分を大切にしながら悲しむことを学ぶことが大切なのです。

フロイトは悲嘆研究の嚆矢となった「悲哀とメランコリー」の中で、一般的な悲嘆と病的なう

つ状態とを分ける要因として自我感情の低下を挙げています。そして、死別体験者が必要以上に自分を責める気持ちの背景には、死んでしまった人への恨みたい気持ちが潜んでいて、それが反転して自分を責める形で現れていることが洞察されています。フロイトのいう自我感情が低下した状態とは、ブッダのいう煩悩の矢が刺さったまま嘆き悲しみ自らを害してしまう状態に近いのかもしれない。

以上のような視点から、悲しむという問題と人間を育てるというテーマについて、仏教心理学は具体的に何をどう提案することができるのかが問われているのではないかと思います。ブッダは四聖諦において、人生が苦しみに満ちていることをありのままに知り尽くすことが必要であると教えています。苦しみには、痛みによる苦しみ、変化や喪失による苦しみ、思い通りにならない苦しみの3タイプがあります。こうした苦しみを知り尽くす時には、その苦しみの意味が見出されます。人生の苦しみの意味が見出されると、その苦しみを背負って生き抜く力が生まれます。苦しみの消滅した涅槃はブッダの説く究極的な幸福なのですが、そこには刺激や興奮がないため、私たちはそれを幸福として認識することができないのかもしれない。

科学や心理学の発達と共に、ブッダの教えを新たな仕方で検証し説明してゆくための多くのツールが得られるようになってきています。日本にはまだなじみの少ない上座部仏教の研究や、現代の西洋仏教における急展開に関する情報も、仏教心理学に新しい視点を提供してくれるものと思われる。

今回の東日本大震災への復興支援の中で私たちが何をすることができるかを深く考えてゆくことは、仏教心理学をより具体的に進展させるための大切なステップになるに違いありません。ワークショップの中で上田先生や篠原先生と直接ディスカッションする時間があればもっとよかったような気もいたしますが、仏教心理学会の場でお二人の熱意にあふれた話を伺い、共にすごさせて頂いた事が十分に大きな刺激になったという思いもあります。

最後に、ブッダは出家修行者同士がお互いに看病し合い、最後まで看取り合うことをサンガの重要な修行として説いたこと。師匠は弟子を子どものように思い、弟子は師匠を親のように思っ

て世話しあいながら瞑想修行を深めてゆくことを奨励したこと。そのことの意味を改めて問い直

しながら、仏教と心理学の双方から人間の成長について実践的な探求を続けてゆくことの大切さを忘れないようにしたいと思います。

### 第3回学術大会参加者感想

仏教心理学会に期待すること

土江 正司 (心身教育研究所)

昨年に引き続き 2 回目の参加でした。島根県でスクールカウンセラー等の仕事をしていますが、仏教が大好きなものですから、仏教心理学会が誕生したのは私にとって本当に心浮き立つことでした。同じ趣味の人たちとこうして集えることは何にも代え難い喜びです。カウンセラー仲間とおおいっぴらに仏教を語り合えず、お坊さんたちとカウンセリングを語り合うことはさらにないわけですから。ところが欧米には仏教好きのカウンセラーが結構いるようで、その方たちの説かれる仏教がまた斬新でおもしろいのです。でも英語で専門的な話し合いは私には無理。ちょっと八方ふさがりな気分でおりましたから、この学会にはとても期待しているのです。そして参加するからには発表もせねばと、2 回とも発表、論文投稿しました。なかなかこんなにモチベーションが上がることも人生で少ないかも知れません。つたない発表でも反応してくださる方がいらっしやるもので、それがご縁でさっそく何人かのすばらしい先生方と出会いを果たせました。本当に嬉しい限りです。

さて、第 3 回大会では上田紀行先生が「慈悲の怒り」というテーマで講演されました。「坊さんは、寺は何やってるんだー」という“怒り”が伝わってきました。この怒りで日本の仏教界も動き出してくれたらと思うのですが、競争原理の働かない業界なのでなかなか難しいかも知れません。僧侶の端くれとして稀に寺に関わるのですが、熱心にお参りされる檀家の方などを見ておりますと、従来通りに寺を維持していくことも非常に重要なことだろうと思います。いろいろ考えさせられた講演でした。仏教心理学は臨床心理学における一つの新しい流れとして受け入れられていくのではないかという予感を私は持っています。しかし仏教界が仏教心理学を受け入れてい

くことはちょっと考えにくい感じです。

仏教がカウンセラーとしての私に与えた恩恵は、仏教的なものの見方や態度をセラピーに織り込ませてくれたことに尽きます。いまのところは神経症の人には曹洞禅的な見方と態度、トラウマ、発達障害、精神病の人には「必ず救われる」という浄土教的信念で接することが有効なように感じています。学校で出会う態度の悪い生徒には臨済禅的な接し方も試してみたいのですが、まだできていません。また来談者に対して傾聴することは紛れもなく仏教的な修行であると思っています。

### 第3回学術大会に参加して

岡野 さつき (高野山大学大学院修士課程仏教学専攻)

「混迷する現代社会——学会・学会員に何ができるか」をテーマに、第3回学術大会が開催されました。第2回大会と今回のプログラムを並べてみると、この間に起きた大きな変化を実感せずにはられません。東日本大震災を経験し、再生の途上にある私たちに何ができるのか、改めて今大会を振り返ってみたいと思います。

私は高野山大学のスピリチュアルケア学科に編入して、心理学と対人援助論を学びました。今は大学院で「人の変容とそのプロセス」をテーマに、瞑想法や修行法について研究しています。在職中に上田紀行先生の仏教ルネッサンス塾に通い、そこで井上ウィマラ先生のお話を聞いたことが今につながっています。私にとって今回の基調講演とワークショップは、自分自身の歩みを見つめ直す作業にもなりました。

上田先生は『がんばれ仏教！』の著作を出されていますが、今回の基調講演では「生き残れるか？ 仏教」という強い表現で、仏教者たちの当事者意識の無さを指摘されました。「当事者性こそが仏教の中核であり、縁起を生きていくことである、仏教とは出会いの中の学問であり宗教である」という言葉が心に残りました。「原発の安全神話と、開戦に突入していった心理には共通性がある」との指摘は、空気に流されやすく、当事者意識の薄かった私たちがこれから為すべきこと

を明確に示していました。

ワークショップでお話しされた篠原鋭一住職の名刺には「お寺には生きているうちに来てください」と書いてあるそうです。お話からは、孤立する人々や被災者を支援し続けてきたご住職の覚悟と気迫が感じられ、現場の厳しさを突き付けられた思いがしました。上田先生も、現場では善意が蹴飛ばされることがしばしば起こり「キズナはキズを含む」のだと話されました。井上ウイマラ先生は、心の傷が原因となって攻撃性が表出されるメカニズムと、そこから新たな絆を結んでいくプロセスを明らかにして、支援する側が知っておくべきことを示して下さいました。

苦を生み出す社会構造を変えていくこと。真の自己とつながり、自らを拠り所として苦を乗り越えていくこと。私たちが足場とすべきことを共有できた二時間半だったと思います。

個人発表では、「心身一如・身心一如」の概念と「胃ろう」の問題を取り上げた仲紘嗣先生、他者との関係性から自己の本質を見つめなおす内観療法の可能性を示した千石真理先生の発表が印象に残りました。説明不足で分かりにくい発表もあり、全体に持ち時間が短いと感じました。次回は、被災者支援や自死、孤独死等の社会問題を扱った発表も期待したいと思います。交流タイムと懇親会では、一人ひとりの顔が見えるこの学会の良さを実感しました。

「求心力より遠心力」。これは第2回大会シンポジウムで平原憲道先生が述べられた言葉です。立場の違いを超えて、遠心力として学会が機能するための「中心軸」が明確になりました。全体として機能しながら、一人ひとりが世界に開かれていく。そんなビジョンが見え始めた今大会だったと思います。

最後になりましたが、実行委員及び立正大学ボランティアの皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 追悼

2011年、学会員の大須賀発蔵先生、牛田博子さんがご逝去されました。別れは尽きません。学会に多大な貢献をして下さったお二人の姿を、ここに偲ばせていただきます。

## 大須賀発蔵先生を偲んで

白岩 紘子 (ホリスティック心理学研究所主宰)

当学会の理事であった大須賀発蔵先生が、昨年 5 月 26 日、享年 88 歳で永眠された。先生は、仏教の知恵とカール ロジャーズのパーソンセンタードの人間観を、産業、教育、心理臨床（カウンセリング）の領域に自ら実践することで、伝えることに人生を賭した方だった。木材会社の代表取締役としては、経営の全てを社員にオープンにするパートナーシップという経営方針を實行されていた。一方で、茨城県教育委員長、茨城県いのちの電話理事長、茨城県精神衛生理事長として、日本にカウンセリングという心理相談を根付かせ、普及のために尽力された。教育関係や企業の要請に応じて講演活動のために、全国を飛び回り、最後まで忙しい日々を送っていた。

更に、茨城県内の企業の援助を受けて、財団法人茨城カウンセリングセンターを設立し、その礎を築かれた。センターは、水戸駅近くの県産業会館の最上階の見晴らしの良いフロアを全て使用している。このことから、先生の心病む人たちへの尊厳の思いが、産業界や教育界の人たちに伝えられた何よりの証しではないかと私は感じている。

先生は、1987 年に仏教伝道文化賞を受賞されている。

特に、亡くなられた前年までエネルギーを注いだ課題、対象は、不登校や閉じこもりの人たちや、親たちへのカウンセリングと、そして、エンカウンター グループだった。

秋の恒例の秩父巡礼エンカウンター グループは、20 年近く続いていたと聞いている。「同行二人」の巡礼は、まさにパーソンセンタードのアプローチそのものであり、「巡礼宿」は、エンカウンター グループと同じであると気づき、深い感動を覚えたと言っている。

また、密教の曼荼羅の配置と循環性の構造は、クライアントの変化のプロセスとそのため条件と同じであることを発見し、私たちに伝えてくれた。私は、これはマンダラ臨床心理学だと強い感動を持って、先生のレクチャーに聞き入ったものだった。また先生は、華嚴経の経典とカウンセリングの共通性についても熱く語られた。

先生は、毎年夏、一週間の集中講座で、これらの全てを講義していた。私たち仲間 3 人は、先

生のレクチャーを記録し、製本にして残そうと企画した。それが多くの方々の助けを得て、「ひびきあう心～カウンセリングに生きる曼荼羅の知恵～」(2001年)となって結実した。先生は仏教臨床心理学を实践された偉大な先達として、末永く私たちの記憶に残ると信じる。

(註：冊子「ひびきあう心」に興味のある方は筆者にお問い合わせください。)

故牛田博子さんへの追悼に寄せて

阿部滋子 (キャリアカウンセラーGCDF・Japan)

日本仏教心理学会設立時から、皆様への勉強会などのお知らせを配信して下さる案内係としてご活躍されました学会員の牛田博子さんが、昨年6月に急逝されました。

牛田さんは日本仏教心理学会事務局長・ケネス田中先生(武蔵野大学教授)が主催する「仏教と心理学等の接点を追求する勉強会」で10年以上に渡り長くお世話係として貢献されました。豊かな表現で季節の移ろいやご自身の挿話を添えて下さる牛田さんの案内状を楽しみにされていた方も多くいらっしゃると思います。

牛田さんが支えて下さった勉強会が土台となり、それをきっかけに今学会設立となったといえるでしょう。

私は武蔵野大学でケネス田中先生にご指導いただいたご縁で勉強会を介して牛田さんに出会い、公私共に大変お世話になりました。

牛田さんは仏教の勉強をする傍ら、忙しい合間を縫い都内の大学で中国現代小説・中国現代戯曲を学んでおられました。特に現代演劇には大きな関心を持たれ、度々中国へも訪れていました。中国語を解さない私も上海話劇芸術中心公演に連れて行っていただきましたが、牛田さんを通訳に美味しい料理を堪能し観光させていただいたことは、かけがえのない楽しい思い出となっております。牛田さんは劇評を執筆され、上海演劇の俳優らとも懇意にされ、これからの益々ご活躍が期待されている時でもありました。

明るいお人柄で誰からも愛され、美食家でユーモアに溢れ、愛犬との生活を大切にしておられ

る魅力的な女性でした。ケネス先生を始め牛田さんの周りにおられた方々、そして私にとりまして牛田さんとの突然の別れは大きなショックと悲しみを齎しました。けれども、私たちは牛田さんの志や希望と共に歩み続けることで、牛田さんと繋がり続けることができると信じております。牛田さんからは多くの愛情をいただきました。

最後に牛田博子さんに心から感謝を申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

## 自著紹介

羽矢辰夫著（青森公立大学）

### 『ゴータマ・ブッダのメッセージ「スッタニパータ」私抄』

大蔵出版 2011 年 9 月 20 日 定価 本体 2,300 円＋税

ISBN: 978-4804330723

筆者は、かつて仏教を学びたいと思ったときに、いったいどこから始めればよいのかよく分からずに困ったことがあります。日本の仏教を見渡してみると、さまざまな宗派に分かれていて、一見すると、とても同じ宗教であるとも思えません。それらをすべて理解しないと仏教のことはわからないのではないかと

思うと、気が遠くなるような感じがしました。そのときに、仏教の歴史の最初にいる人物が何のように考え行動したのか、を探求すればよいのではないかというアイデアが浮かびました。そこから筆者のゴータマ・ブッダについての探求が始まります。今日まで数十年にわたって探求をつづけ、僭越ながらいくつかの著作を世に問うてきました。

前著『スッタニパーター—さわやかに、生きる、死ぬ』（NHK出版、2007 年）では思いきって、ゴータマ・ブッダの思想のエッセンスを抽出するという試みに挑戦しました。本書『ゴータマ・ブッダのメッセージ—「スッタニパータ」私抄』は、その各論に相当するものです。章立ては以下の通りです。序章、第一章「スッタニパータ」、第二章「欲望」、第三章「わたし、わたし



しのもの」、第四章「行為」、第五章「ゴータマ・ブッダの生涯」、第六章「戒律・瞑想・智慧」、第七章「ばらばらコスモロジーからつながりコスモロジーへ」、終章。

『スッタニパータ』とは、原始仏教經典のなかで最も成立が古いとされ、ゴータマ・ブッダのことばに最も近いとされている經典です。断片的な記述が多く、体系化などの傾向はあまりうかがわれません。それがかえって、当時の雰囲気を生まなましく伝える役割をはたしています。本書では、それらの断片を集めて、筆者なりの観点からテーマ別に再構成しました。ゴータマ・ブッダが真に伝えたかったと思われる教えを、ゴータマ・ブッダのメッセージとして、理解しやすく提示しています。とはいえ、わたしたちが想定したこともない認識のあり方やコスモロジーもあわせて提示されています。それを納得して理解するのは少なからずむずかしいかもしれません。

筆者がいつも気をつけているのは、自分自身が理解できないことばをできるだけ使わないということです。自分自身が納得できるレベルで考察しているので、全体的にやさしくかみ砕いたことば使いになっていると思います。自分自身が納得できることばで考察し、現代人が理解できることばで表現したつもりです。そうはいつても、内容的には現代人の常識の枠を超えている部分があるので、ことばとしては理解できると思いますが、より実感したいというのであれば、自分自身が瞑想などの実践をしなければならぬことはいまでもありません。

2500 年前のインドの思想ですから、原語で実感をもって理解できる人はまずいないでしょう。かならず一度みずからの母国語に翻訳して理解します。そのときに、血肉になっていることばを使わないと、実感をもって理解できないし、自分自身の思想にはなりません。現代に生きるわたしたちが理解するためには、現代に合った表現、ことばの使い方が必要です。仏教の専門用語を使って、記号的に変換することはできます。特に漢訳語は便利ですが、今となっては、わたしたちの実感とはほとんど接点をもちません。本書で仏教の専門用語があまり登場しない理由です。筆者自身が仏教の専門用語を使ってものごとを考えていないからです。

「苦しみを消滅させるためには欲望を消滅させなければならない、といわれますが、欲望を消滅させるとどのような人間になるのでしょうか」、「苦しみがあってこそ成長できるので、苦しみを消滅させる必要はないのではないのでしょうか」、「無我になれ、といわれますが、我をな

くすのはよくないことなのではないでしょうか」、「苦しみを消滅させると、楽しみもいっしょに消滅するのではないのでしょうか」、「智慧とは何ですか、生活の智慧とは違うのですか」、「さとりとは何かに気づくことですか」、「人生は苦しみであるというのが不変の真理であれば、われわれに救いはないのではないのでしょうか」。このような、素朴でありながら本質的な問いに対する筆者なりの答えが用意されています。これを契機に、より深い考察が幅広く進んでいくことを期待します。

本書では、ゴータマ・ブッダの思想を人間のこころの成長という観点から捉えています。心理学を専門とする方々にはむしろ近しく感じられるのではないのでしょうか。仏教を専門とする方々には仏教の専門用語がほとんど出てこないで、仏教書とは思われないかもしれません。しかし、ゴータマ・ブッダの思想が仏教の専門用語を使わなくても表現できるという意味では、新鮮に感じていただけるのではないかと思います。

本書でゴータマ・ブッダの思想ないし仏教の思想の核心を大づかみに把握して、それから難解な論書なり大乘仏教経典なりに向かうのもよいかもしれません。あるいは、より深く自分自身を探究するきっかけになる方もいるかもしれません。自分自身の探究こそがとりもなおさず、ゴータマ・ブッダの思想ないし仏教の思想を深く探究することであるということを再確認できるでしょう。

岡野守也著（日本仏教心理学会運営委員・サングラハ教育・心理研究所主幹）

『コスモロジーの心理学——コスモス・セラピーの思想と実践』

青土社、2011 年、2,200 円（税別）

ISBN: 978-4791766321

昨年 12 月に、ほぼ 20 年にわたって実験的に実践して効果を確認してきた「コスモス・セラピー」のまとめの本を出しました。コスモス・セラピーは、短く言えば、現代科学の宇宙論＝コスモロジーを援用して、現代人の心を深い部分



から癒すための試みです。

現代の日本では心の病が激増していますが、その傾向は、すでに 1960 年代後半から始まっていますし、もっと遡るとすでに終戦後から始まっていると言ってもいいかもしれません。その最大の理由は、明治維新と敗戦という 2 つのプロセスを経て、日本が過度に近代化されたことにある、と私は考えてきました。そのあたり著書でかなり突っ込んで書きましたが、ここでもごく簡略に述べておきます。

近代化の中核的問題は近代科学の物質還元主義的な宇宙観＝コスモロジーだと思われまます。デカルト的な主客分離と分析という方法で世界を観察・研究していくと、まず「神はいない。人と物だけがある。そして人間（個人）がいちばん尊い」というヒューマニズムに至り、さらに徹底すると「物だけがある・すべては物である」という物質還元主義的なコスモロジーに至ります。

「すべては物」という考え方を人間に当てはめると、当然のことながら「すべてには意味がない」ということになります。加えて、神＝絶対なる者という根拠を否定すれば当然絶対の倫理も見出せなくなります。「すべては物であり、したがって絶対の倫理も意味もない」というニヒリズムは、近代主義の最終的な結論でしょう。

ニヒリズム的考え方を突きつめると、「生きていることには〔絶対の〕意味はない」ので、死にたくなってしまいます。しかし、突きつめないで、とりあえず個人・自分の好き、楽しい、快という主観的で相対的な意味を感じていられれば、当面生きていくことはできます。快樂が生きる理由だという考え方を快樂主義といいます。

その場合、近代的なヒューマニズムでは「個人がもっとも尊い」と教えており、しかも絶対の倫理はないのですから、「自分がいちばん可愛い」というミーイズム、「自分だけが可愛い」というエゴイズムをとどめる根拠は見出せません。

こういう状況に置かれた現代人、特に若い世代ほど、「〔私が〕楽しくなければ人生じゃない」と思い込んでおり、したがって楽しくなくなったら、「何のために生きているのかわからなくなった」「生きている意味がない」と落ち込んでしまう傾向が強いようです。

「落ち込み」と「うつ」という心理状態は程度の問題にすぎず、現代人はかなり簡単にうつと

いう心の病に陥ってしまうようです。詳述するスペースはありませんが、その他の心と行動の病のかなりのもので、個々の具体的な誘因はあるにしても、根本的にはニヒリズムから来ているのではないか、というのが私の推測です。

近代科学のコスモロジーで考えると、現代人はどうしてもニヒリズム的になり、突きつめるとまず心を病み、さらに進むと自殺したくなり、そうならないためには、突きつめないでエゴイズム的に快楽を追求するというパターンにはまってしまうでしょう。

ところが幸いなことに近代科学と区別する意味でいう「現代科学」は、「すべては物にすぎない」というコスモロジーを克服していると思われまます。

アインシュタインの相対性理論によって、「すべては物」というより「すべては〔宇宙〕エネルギー」だということになり、ガモフの「ビッグバン仮説」以来の科学的宇宙論の発展・深化によって、「すべては 137 億年前のただ一つの宇宙エネルギーの塊から始まった」ということになり、プリゴジヌの散逸構造論により物質は（そしてもちろんエネルギーも）それ自身がシステムを生み出す能力・自己組織化能力を持っていることが明らかになり、ワトソンとクリックの遺伝子の二重らせん構造の発見以来の研究により「すべての生命はただ 1 つの共通の先祖から分岐・発展した」ということになり、ヘッケル以来のエコロジーの研究により「地球上ではすべての生命と環境つまり非生命が一つのエコ・システム（地球生態系）をなしている」ことが明らかになっています。

これらの学説を統合的に理解すると、宇宙は 137 億年かけて、自己組織化・自己複雑化という意味で〈進化〉し続けてきている、そしてその進化はこれからも続く、宇宙は、一つのエネルギー→物質→生命→心→魂・霊性という進化を遂げてきており、それは「宇宙進化には方向性がある」ということであり、それを「宇宙には意思がある」と解釈することも十分に可能です。さらに、自分に引きつけて理解すると、「私はもともと一つの宇宙と一体で、その一部であり、その進化のプロセスの一部である」ということになるでしょう。

戦後教育の中で小さい時から刷り込まれてきた近代の物質還元主義的コスモロジーに代えて、そうした現代科学のコスモロジーを実感的に内面化することができれば、必然的に現代人のニヒ

リズム（およびエゴイズムと快樂主義）は克服され、そこから生まれた心と行動の病もまた深いレベルから癒されることになるはずだ、というのがコスモス・セラピーの基本的アイデアです。

なお、仏教心理学との関係を一言だけ述べておけば、コスモス・セラピーは現代日本人向けの「方便」だと言ってもいいと思っています。科学主義的な教育に染まって宗教－仏教に対する偏見を持ちがちな現代日本人には、現代科学を入り口にして、「科学で言ってもあなたと宇宙は一体ということになるし、実は仏教は昔からそのことへの目覚めを促してきたのですよ」と伝えると、非常に受け取りやすくなるようです。その妥当性・有効性について、学会のみなさんにもぜひ検討・検証をしていただけると有り難い、と思っています。

大下大圓・千石真理他共著、谷田憲俊・大下大圓・伊藤高章編

『対話・コミュニケーションから学ぶスピリチュアルケア ―ことばと物語からの実践―』

診断と治療社 2011 年 7 月 15 日 定価 2,800 円

ISBN: 978-4787818263

医療や福祉、介護の領域でスピリチュアルケアへの関心が高まっています。特にホスピス、緩和ケア領域で致命的疾患を抱えた患者や家族へのスピリチュアルケアは必須とされ、人材育成に取り組み、臨床に専門職を送り出している機関も複数あります。2007 年に日本スピリチュアルケア学会が発足し、医学、看護学、哲学、心理学、宗教学、社会学、経済学等など、あらゆる分野から集まって学際的な学会を構成し、専門職の認定制度を準備しています。一方、医療関係では、日本ホスピス・在宅ケア研究会、日本死の臨床研究会、日本緩和医療学会などにスピリチュアルケア分野から、多くの発表と論文が寄せられています。しかし、スピリチュアリティの理解とスピリチュアルケアはいまだ不十分といわざるを得ない実情があり、スピリチュアルケアには分野の多様さから、様々な取り組みが求められているにも関わらず、実践者向けの指南書が乏しいという問題があります。本書は、この問題に応えるために、様々な分野の第一線で直接的、間接的にスピリチュアルケアに携わる専門



家に具体的な事例を中心とする執筆を依頼し、本書によってスピリチュアリティの理解が深まり、スピリチュアルケアの発展につながることを目的として出版されました。

本書は、スピリチュアルケアの概説（1. スピリチュアルケアーコミュニケーションからの展開 2. 宗教とスピリチュアルケア - 仏教からスピリチュアリティの階梯を紐解く 3. 臨床スピリチュアルケアの実践）と以下のスピリチュアルケアの実践とコラムで構成されています。

1. ホスピスにおけるスピリチュアルケア 2. 緩和ケアにおけるスピリチュアルケア 3. カウンセラーによるスピリチュアルケア 4. 看護師によるスピリチュアルケア 5. ビハラー病棟におけるスピリチュアルケア 6. 緩和ケア医師によるスピリチュアルケア 7. がん治療におけるスピリチュアルケア 8. 歯科医師によるスピリチュアルケア 9. 悲嘆のスピリチュアルケア 10. トラウマ的死別とスピリチュアルケア 11. 薬剤師によるスピリチュアルケア 12. 言語聴覚療法によるスピリチュアルケア 13. 作業療法によるスピリチュアルケア 14. 芸術療法によるスピリチュアルケア 15. 瞑想療法によるスピリチュアルケア 16. 内観療法によるスピリチュアルケア 17. セラピューティック・ケアによるスピリチュアルケア 18. 認知症患者へのスピリチュアルケア 19. 家族療法とスピリチュアルケア 20. ボランティアによるスピリチュアルケア 21. 子供のスピリチュアルケア 22. 災害時のスピリチュアルケア

この内、15. 瞑想療法によるスピリチュアルケア（大下大圓著）と 16. 内観療法によるスピリチュアルケア（千石真理著）は日本仏教心理学会会員により、仏教と心理学の融合が、いかに医療の現場でのスピリチュアルケアに導入されたのか、という事例を報告しています。本書は、様々な分野での具体的な事例が幅広く描かれていますので、各方面で活動される学会員の皆様の実践書として、お役に立てれば幸甚でございます。

## 編集後記

千石真理

(京都大学こころの未来研究センター)

学会発足時より、ニュースレター編集でご苦労いただいた井上ウィマラ先生に代わって、今回第7号より、編集を担当させていただくようになりました。浅学菲才ゆえ、学会員の皆様にご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導賜りますよう、お願い申し上げます。ニュースレターは、年に一度発行される学会誌にも掲載されますので、今後とも、ご協力いただきますよう、お願い致します。

第3回、学術大会を振り返ると、この度の大会では、これまでには感じなかった温かさと、連帯感が会場に溢れているように思いました。今、日本では大震災や放射能汚染、国家財政の赤字と貧困世帯の増加等に伴い、今までの価値観が崩れ、苦悩に心を病む人も急増していると察します。宗派、学派の枠を超えて本学会が生み出す研究、実践の成果が、今後ますます必要とされます。私たち学会員が共に気づかされ、深め合い、仏教と心理学が手を携えて歩む姿が、混迷する日本社会への貢献に繋がっていくことを、願わずにはられません。